

『札幌大学教養部紀要』最終号によせて

教養部長 高 田 純

1994 年度をもって札幌大学教養部が廃止となり、本『紀要』も今回で最終号となる。1967 年に札幌大学が開学すると同時に教養部が発足し、最初の 5 年半は女子短期大学部と共同で紀要（『札幌大学教養部・女子短期大学部紀要』）を発行したが、1982 年 9 月からは独立の紀要を刊行することになった。今回は女子短大部との共同の紀要から通算して 46 号目、独立の紀要としては 26 号目を数える。

教養部は 28 年間にわたって札幌大学の一般教育（外国語、保健・体育を含む）、リベラル・アーツ教育を担当するとともに、さまざまな分野の研究者によって多面的で学際的な研究を推進してきた。本紀要はその研究成果を発表する場として学内外において重要な役割をはたしてきた。

1989 年からは、より広く自由な学術的交流をおこない、また一般教育についての研究を公表するための場として『リベラル・アーツ』（札幌大学教養部教育研究）を 11 号にわたって発行してきた。今日、大学教育の内容や方法が根本的に問われているが、この点で『リベラル・アーツ』の刊行は全国的な先駆的な試みであったと自負している。

研究の「自己点検・自己評価」のうえで大学紀要の位置づけがしばしば問題とされている。レフリー制が不明確なことなどを理由に、紀要掲載の論文を低く評価する向きもあるが、この問題についてこの機会に私見を述べることをお許しいただきたい。研究業績の評価については多様な学問分野の実情を考慮すべきである。人文科学や社会科学のなかには、多数の学会会員にもかかわらず、毎年学会誌に掲載される論文が数本という学会もある。国際学会組織の整備されていない分野もある。また、自然科学のような評価の国際的基準が確定していない分野も少なくない。人文科学、社会

科学では、その研究対象の複雑さのため評価の基準は必ずしも一律ではない。また、自説を実証するために、研究の方法や過程をも含めて詳細に見解を開陳する必要があることもあり、この場合は学会誌の限られた紙幅では尽くされないであろう。じっさい、学会誌における公表と平行して、より深めた研究報告のために紀要を利用する研究者も少なくない。人文科学、社会科学の諸分野では紀要は学術研究を下支えする重要な役割をはたしてきた。本紀要もその一環を担ってきたと考える。

1995 年度からは、本紀要は『札幌大学総合論叢』に発展的に解消される。新しい紀要が本紀要の精神を継承・発展させ、諸分野の学際的総合を推進するために貢献することを期待したい。